
ガンバライドバトル ライドマスターズ ~Ver.DARKNESS~

柳雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ガンバライドバトル ライドマスターズ Ver・DARKN
ESS

【Nコード】

N66020

【作者名】

柳雨

【あらすじ】

カードに記録された情報^{データ}を使って画面内で仮面ライダー同士を激しい戦いを繰り広げさせることが出来る夢のゲーム『ガンバライド』、だがそのガンバライドを破壊の力として使い、世界を巡る一人の少年がいた…

（前書き）

本作はBOMBOMB COMICSの漫画『ガンバライドバトル
ライドマスターズ』の設定を使った二次創作短編です

荒唐無稽な設定と残酷な描写有りなので苦手な方はご注意ください
さい

・仮面ライダーバトル『ガンバライド』。

・データカードとなったヒーロー『仮面ライダー』をゲーム画面内に呼び出し、2対2でバトルを行う夢のカードゲーム。

・1枚のカードには一人のライダーデータがあり、その種類・枚数・レアリティなどは様々かつ膨大で、ほぼ全ての歴代ライダーを網羅する。

・…これは暗黒の力を使いこなし、あらゆる世界を滅ぼしてきた一人の少年の物語である。

・とある世界の某市。

「うわああああああ!!」

「キャアアアアア!!」

「た、助けてくれエツ!!」

・絶え間無く響く爆音、全てを焼きながら燃え盛る炎、倒壊する建造物、逃げ惑う人々の悲鳴…。

・人々は自分達に迫る恐怖の『追跡者達』から必死に逃げるが…。

「だ…ダメだ！瓦礫が邪魔してこれ以上進め…グフツ！？」

「ヒツ！？」

・瓦礫に阻まれ、完全に逃げ場所を失った人々、そしてその中の一人であるサラリーマンが突然飛んで来たクナイの様なものに首を貫かれ、鮮血を撒き散らしながら崩れ落ちる…。

「CLOCK - OVER」

『クク…ねえ？どうしたの？もう逃げないの？』

「あ…ああああ…！！」

・そして突然何者かが現れ、声をかけられ、全員に戦慄が走る…。

・一切の光が宿らぬ闇の様な漆黒の装甲、ボディには剥き出しになった血の様な赤い電子回路が走り、カブトムシを思わせる様な黒い仮面に不気味に輝く金色の複眼の戦士が現れ、先程サラリーマンに投げつけたクナイを乱暴に引き抜きながら、冷酷に人々を追いつめる…。

・彼の名は『仮面ライダーダークカブト』、平成仮面ライダーシリーズ8番目の『仮面ライダーカブト』終盤に登場した、放たれた狂気の戦士…しかし、その彼が何故『現実世界』で姿を現わし、人間を殺そうとしているのか…？

『鬼ごっこはおしまいか…フフ…死んじゃえ』

「ONE-TWO-THREE...」

・ダークカブトはもう逃げる場所の無い人間達を興が削がれた様に見下し、ベルトのダークカブトゼクターのボタンを三回押し、ゼクターホーンを折り曲げる。

ライダー…キック。

「RIDER-KICK」

「アハハハハ！ゼルアアアアアアアアアアッ！！」

「ギャアアアアアアアーッ！！」

「うがぁあぁあぁあぁ！」

「嫌あ
あああ
あああ！」

・ダークカブトは脚にタキオン粒子を集中させ、飛び蹴りの要領で必殺技を発動し、人間達を一人残らず全て貫く様に蹴り殺し、タダの赤い肉の塊にと変えてしまった…。

クク… アハハハ ♪ アハハハハ… ♪ ハア アアアアアア… ♪

「ダークカブトは返り血を全身に浴び、ただただ狂った笑いを浮かべ、そのまま次の獲物を探しに行った…」。

一方、別の場所では……。

『ハハハハハ！！待てエツ！！』

『ゲヒヤヒヤヒヤヒヤ！！』

「はあ…はあ…きゃあツ…！！」

「ママー！！」

・母親と娘の二人が二人組の何者かに追われ、母親が途中で転んでしまい、娘が立ち止まってしまう。

『もうおしまいだなアツ！！ハッハッハッハ！！』

『ギヒヤヒヤヒヤツ！！』

・母娘を追いかけていた二人組は、記念すべき昭和仮面ライダーシリーズ第1作目『仮面ライダー』に登場するバツタの力を宿す改造人間『仮面ライダー1号』に酷似した姿こそしてるが、二人共…ライダーらしからぬ下卑た高笑いを上げている。

・一人は黄色のマフラー・グローブ・ブーツを着け、もう一人も同じ様に黄色のグローブとブーツを着けてたが違いはマフラーの色が紫になっていたことだった。

・彼らは『ショッカーライダー』、『仮面ライダー』での新たな組織『ゲルショッカー』が生み出した1号・2号と同等かそれ以上の力を持つという最強の戦闘兵器であり、黄色のマフラーがNo.1、紫のマフラーがNo.5である。

「お願いします…この子は、娘だけは…！！」

「うえええん…怖いよ…ママアアアア…」

・母親はせめて幼い娘だけとは思って庇い、娘はシヨッカーライダー達に追い詰められて泣き叫び出す。

・…だが、返ってきた『返事』は非常に非情だった。

『ゲヒヤヒヤヒヤ！！ヒヤッハアアアアア！！』

「助けて！マ…！！」

「い、嫌アッ！？嘘…こんな…！！」

・シヨッカーライダーNo.5が目にも留まらぬ疾風の如き速さのパンチを娘の顔面に叩き込んだ瞬間、頭が破裂し、彼の拳を赤い血でベツトリと染めた。

『ハハハハッ！！そんなにしつこく「娘だけは、娘だけは」と泣き叫ばれりゃあ殺したくなるっての…！！』

「な…なんで…なんで殺したの！？突然現れてアンタ達一体なんなのよオーッ！！」

・下劣な高笑いをするシヨッカーライダーNo.1を見た母親は娘を殺された怒りをぶつける様に石を拾って無謀にも立ち向かうが…。

『なんでもないさ…オレ達は単なる「人殺し」さアアアアッ！！』

「ギャアアアアア！！」

・しかし、No.1は全く焦らずに冷静に対処…自分の指に仕込んだロケット弾を放ち、母親を爆殺し、グチャグチャと死体を踏み潰してブーツを血で汚す。

『フハハハハハ！人間が偉大なるショッカーの科学力に勝てる訳がない！！』

『ゲヒヤヒヤヒヤ！ギヒヤヒヤヒヤ！！』

・No.1とNo.5は二人揃って母娘の死を嘲笑いながらその場から立ち去った…。

・都市中の他のあらゆる場所でもダークカブトやショッカーライダー達以外のライダー達が暴れ回り、破壊と殺戮の限りを尽くしていた。

「F I L L - A T T A C K - R I D E : D E ・ D E ・ D E ・ D E C A D E ! ! 」

『おりゃあああああああ！！』

「くぐあああああああ！！？」

『ハッ…この程度か！！』

・いくつものカードのビジョンが逃げる人々を逃さぬ様にホーミングとロックオンの役目を果たし、そこからキックを叩き込む技『デイメンションキック』を放ち、全員を文字通り『破壊』し、血の雨や飛散する臓物に身体を濡らして立ち尽くすは『仮面ライダーディ

ケイド』の主役ライダー・ディケイド…。

…だが、その顔は悪魔の様に恐ろしく歪み、人を殺した罪悪感など微塵も感じさせない態度を見せていた…。

…それもそのはず、これは劇場版『仮面ライダー×仮面ライダーMOVIE大戦2010』にて、主人公・門矢士が『真の世界の破壊者』として目覚めてしまった時の姿『仮面ライダーディケイド』の『激状態』、ライダーと世界を破壊する者が人間を殺したところでそんなものを感じることもないのだ…。

『グオオオオオオオオオオオオオオオオ!!』

「ぶぎゃ!?!」

「ぐは!?!」

「おげべえッ!?!」

…さらには黒と黄金の刺々しい装甲と仮面を身に纏い、四本の金色のツノと闇色の瞳の魔人…『仮面ライダークウガ』ライジンググアルティメット・ブラックアイ』が獣の如き咆哮を上げながら、人間の首を挟じ切ったり、素手で無理矢理胴体を真つ二つに引き裂いて血飛沫を至近距離から浴びたり、腹から内臓を刳り出したりといった鬼畜の所業を行っていた。

…彼ら以外にも、『仮面ライダー王蛇』『仮面ライダーカイザ』『仮面ライダーネガ電王』『仮面ライダーリュウガ』『仮面ライダーエターナル』と言った所謂『悪のライダー』といったカテゴリーに当て嵌まるライダー達が欲望のままに、本能のままに人間を、世界

を蹂躪していた…。

・とある広場…元は児童公園だったが今はライダー達によって荒廃化し、タダの荒地となっていた、そしてここに二人の人物が睨み合っていた…。

「フフフ…。」

・不敵な笑みを零す一人の少年…漆黒の闇の様な黒髪、濃紫の瞳、上下共に黒一色の服装、腰にはカードホルダーを提げていた。

「はぁ…はぁ…クソ…!!」

・もう一人は頭や腕から血を流し、服もボロボロ、立つのもやっとな満身創痍の状態の少年…。

・二人の間にはガンバライドのゲーム筐体、果たしてこれが何を意味するか…？

「この世界は終わったも同然だ…なにせ、オレのライダー達が世界のほとんどを『破壊』した上に、お前を除いた全ての『マスター』達を『皆殺し』にしたんだからな。」

「この…悪魔、が…!!」

・黒い少年「暗樹悠真は得意気に語りながら、怪我で息も絶え絶え」

かみは・フウジ

な少年〓神羽風児を見下しつつ、カードホルダーから何かを取り出したので風児もカードをポケットから取り出す…。

・互いに出したものはガンバライドのカードだが、二枚共、ゲームに使う『ヒーローカード』でもなく、サポートに使う『スペシャルカード』でもない…何も描かれて無い、『白いカード』だった。

・二人はカードをガンバライド筐体に投げ込み、叫ぶ。

「チャージ！！ライダーコール！！」

「PROGRAM - DRIVE」

・ゲーム画面にこの様な表記が為され、画面が光り輝いた瞬間、二人のカードから何者かが実体化する…。

『愚かな…世紀王に挑もうとは…！！』

・悠真のカードから現れたのは銀色の仮面と装甲に身に纏い、緑に輝く複眼の様な眼、そして威厳と圧倒的存在感に満ち溢れた『悪のカリスマ』と言わんばかりのオーラを漂わせる一人のライダー…『仮面ライダーBLACK』の主役ライダー〓BLACKの最大のライバルにしてみう一人の世紀王『シャドームーン』。

「XTREME！」

『さあ…お前の罪を数えろ！！』

・風児のカードから現れたのは、『X』状の仮面に赤い眼、ボディは右が緑、左が黒、真ん中はプリズムの様に神々しく白く輝いてい

るライダー…『仮面ライダーW』の後半に登場した『エクストリームメモリ』の力によって変身し、二人の主人公『左翔太郎とフィリップ』が地球の記憶とシンクロした最強のW、『仮面ライダーW』サイクロンジョーカーエクストリーム』。

- 悠真と風児、二人は『ライドマスター』と呼ばれるガンバライドカードのライダーを実体化させることが出来る特殊な才能を持つ存在、ライドマスターは『マスターライダーカード』…そう、二人が持っていたあの『白い（ブランク）カード』に選ばれることで、ライダーと一体となって現実世界でのバトルが可能となるのだ。

「クククク…W〃C〃X（ダブル〃サイクロンジョーカーエクストリーム）、確かに強いが…本当にソイツでオレのシャドームーンの相手が勤まるのか？」

「…なん…だとツ!？」

- 挑発する様にやはり不敵に笑う悠真の言葉に風児は激昂した。

「気にするな…どのみち貴様はソイツと一緒にこの世界の最期を見届けるだけなのだからな。」

「舐めるなアツ!!行くぞ!W!!」

『『おおおおおおおおッ!!!』』

「やれ…シャドームーン…!」

『フン…!!!』

・勢いよく駆け出したW「CJXとは対称的に、シャドームーンは『カシャンッ』という金属的な足音を立てながら悠然と歩み寄る…」

『セヤアアアアアアアアアアッ！！』

『フハハハハ…どうした、どうした？まるで当たらぬではないか？
シャアアアアアッ！！』

『ぐあああああ！？』

『がふッ！？』

「W！？」

・Wは固有武装であるビッカーシールドから専用武器・プリズムソードを引き抜いてシャドームーンに斬りかかるが、シャドームーンは余裕でその斬撃をかわしつつ、蹴りやパンチを顔や腹へと素早く的確に叩き込んでいく。

『フン！ハッ！ルアッ！ハッハッハッハ！！』

『グアッ！？ガアッ！は…反撃が、出来ない…クッ！？』

『こ、このド悪党…うがああああ！？』

「な、なんで…こんなことって…！」

「有り得るんだよ…こんなことがな…。」

・シャドームーンはその後最強フォームの状態であるWをほとん

どノーダメージで圧倒してWに土の味を味わせており、風児はあまりにも一方的な戦いに唾然としたが、悠真は淡々と当然の様に述べた。

『ハア…ハア…風児、オレと相棒は今まで色んな悪党を見たが…コイツらは理屈抜きでやべえ…!』

『このまま野さばらにしたら、多くの世界の多くの命が奪われ、悲劇が絶え間無く生み出されてしまう…!』

「そうだ…Wの言うとおりだ、コイツのせいでオレの仲間みんな…みんな…!!」

・そう、風児とWを除いたマスターとライダー達は全員、誰一人として悠真とシャドームーンをはじめとした悪のライダー軍団に対抗出来ず、無残にも惨殺されてしまったのだ。

・無念にも死んでいった仲間達のためにも、風児はここで死ぬ訳にはいかない。

「だから…だからアツ!!」

・風児はサポート用のスペシャルカードを発動、瞬間、水色のボディのサメを思わせる『仮面ライダーアビス』が登場した。

『ククク…私がアナタ達に判決を下します、死刑だツ!!』

『『うおおおおおおお!!』』

『ぬ…?』

「へえ…あんな博打カードを使うマスターがいる上に『当たり』が出たなんてね…」

- 悠真は愉快そうに感心している…アビスは三分の一の確率で攻撃力を+800出来るが万一外れれば防御が一気に-400されてしまう危険性があり、ハッキリ言って命懸けのギャンブルカードしか言いようがない程使い所が難しいカードだ、しかし風児は運が良かったのか、当たりを引いて攻撃力は倍になった。

『でえやあああああああああ！！』

『グヌウツ！？…フハハハハハ！…そうだ！やり方はどうあれこれぐらい強くなければ張り合いがないと言つものだ！だがな…』

- さすがに攻撃力が倍増したWにシャドームーンも不利にならざるを得なくなったが、確実なダメージが入ったにも関わらずマスターの悠真同様不敵な笑みを零しながら戦う。

『…スペシャルカード発動…来い、ネガデンライナー！！』

『…しま…！？』

『…ギシャアアアアアアアア！！』

- 風児とWが気づいた時には既に遅く、空から時の列車「デンライナー」に酷似してるが紫の禍々しいトライバルパターンの紋様が入ったネガ電王専用のネガデンライナーが乱入、搭載されていたギガンデスヘル・ギガンデスヘブン・ギガンデスハデスの中から現れ総攻撃を仕掛け、ネガデンライナーからもビームが放たれその結果…。

『『グアアアアアアアアア！？』』

「うわあああああああ！！」

・二人（＋もう一人）は爆風に巻き込まれ、地面を転がる…Wはライダーだからあまりダメージは無かったが問題は人間である風児の方だった…。

「ああ…アアアアアアアアアアアア！？腕が…脚がアツ！！」

『ふ…風児イイイーツ！！』

『しまった…奴らはこれを狙って！？』

・風児は先程のネガデンライナーの攻撃で左半身を失い、焼け焦がれ、千切れてしまった左腕と左脚があさつての方向に散らばり、さらには脇腹から内臓がはみ出てしまい、辺り一面が血の池になっていた…。

『マ…マズイ！風児が死にかけてて実体をこれ以上を保てない！？』

『畜生オツ！！人間まで巻き込むなんて…ド外道がアアアアアアアアアツ！！』

・Wを実体化させているWマスターの風児が死にかけてるため、Wの身体が徐々に消滅し始める…悠真の風児を巻き込んだネガデンライナーによるダーティープレイにWは激怒し、シャドームーンに詰め寄るが…。

『遅い…!!』

『!!?』

・シャドームーンはいつの間にかWの頭上に浮かんでおり、そしてそのまま両脚を突き出して破壊のエネルギーを放出しながらWの顔面目掛けて急速に迫る。

『シャドーキックッ!!』

『『ああああああああああ!!?』』

「助け…死にたくな…!!」

・必殺技『シャドーキック』をモロに食らい、Wは木っ端微塵に消し飛び、風児もその爆発に巻き込まれて死亡…。

『フンッ…』

「ご苦労様、シャドームーン…後はダークカブト達が戻り次第、一緒に次の世界に行こう。」

・悠真はシャドームーンに近寄り、労いの言葉をかけながら、風児の死骸を足蹴にした。

「彼もよくやった方だけど僕らの足元にも及ばないね…退屈させないで欲しいよ全く…。」

・そう…『退屈』、彼の目的はなんてことはない、全てが単なる『暇潰し』に過ぎなかったのだ。

- 自分を楽しませる高いレベルのマスターを求めて戦いたいがためだけに、これまでにいくつもの世界を滅ぼし、何人ものマスターを殺し、全てを蹂躪してきた…。

「次はどんな世界なんだろう…楽しみで仕方ないよ、フッフ…ハハハハハハハ…!!」

- 背後から灰色の歪んだオーロラが現れ、悠真は狂笑しつつ、次の世界への希望と期待に胸を焦がれていた…。

- そして数時間後、この世界の消滅が確認された…。

- 暗黒の力に魅入られた少年「暗樹悠真と悪のライダー達は向かう…次の世界を暗く冷たい闇の色に染めるために…」。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6602o/>

ガンバライドバトル ライドマスターズ ~ Ver.DARKNESS ~

2010年11月3日01時24分発行